令和４年度　後期　自己評価書

篠山小中学校組合立篠山小中学校

【評価基準】　A：目標を達成　　B：８割以上達成　　C：６割以上達成　　D：６割未満

1　特色ある学校づくり

評価項目	評価指標及び目標値	評価	学校による考察（◇）　改善方策（◆）	評価資料	個別評価	肯定率 4＋3	アンケート結果（%） 4	3	2	1
小中一貫教育を目指した教育の推進	組合立学校や小中合同校舎の特色を生かした、小中一貫を目指した教育活動を推進している。 目標値：教職員、保護者、地域住民の**90%以上**が肯定	A	◇時間割の編成や年間指導計画など、小中間で見直せる部分を改善してきた。また、教職員間で細かく共通理解を図りながら、合同で学校行事や各集会などを計画・実施していることが、高評価につながっている。 ◆現在の体制を引き続き維持し、児童生徒の発達段階に合わせながら、9年間を見通した教育の推進に努める。ホームページや各種たよりで小中合同の活動を掲載するなど、地域住民や保護者に積極的に周知していく。来年度のへき地教育研究会に向けては、研修面での充実を更に図る必要がある。	教職員1	A	**100**	70	30	0	0
				保護者1	A	**100**	57	43	0	0
				地域1	B	**87**	75	12	13	0
		A	◇小中合同の行事や活動をホームページや学校だよりに掲載し、地域住民や保護者に積極的にアピールしたことが高評価につながっている。また、南予教育事務所要請訪問を活用し、小中連携や合同学習の在り方について指導していただいたことにより、研修面においても深化することができた。 ◆引き続き、合同校舎という利点を生かし、日常から情報交換を行うなど、小中一貫を目指した教育活動を展開する。また、来年度のへき地研究大会に向けて、ふるさと学習の核となる総合的な学習の時間の年間指導計画を改善していく。	教職員1	A	**100**	67	33	0	0
				保護者1	A	**100**	60	40	0	0
				地域1	A	**100**	62	38	0	0
ふるさと教育	地域の教育力を生かした「ふるさと学習」を推進し、郷土愛の育成に努めている。 目標値：教職員、児童生徒、保護者、地域住民の**90%以上**が肯定	A	◇今年度は、早い段階から地域の外部講師を学校に招いて、ふるさと学習を行ってきた。小学校は甘酒づくりや地域の歴史について、中学校は篠川の水質調査や公共施設のボランティア清掃など、地域に根差したふるさと学習が行われているため、高評価を得ている。 ◆生活科及び総合的な学習の時間のカリキュラムを再度見直し、小中の連携を図りながら効率的に「ふるさと学習」を進めていく。また、ボランティアスタッフの参加を継続して呼び掛け、人材バンクに登録していただくことで、学校と地域の連携を密にしながら、「ふるさと学習」を充実させていく。	教職員2	A	**100**	40	60	0	0
				児童生徒7	A	**100**	64	36	0	0
				保護者2	A	**100**	43	57	0	0
				地域2	A	**100**	63	37	0	0
		A	◇篠南プロジェクトで取り組んだパンフレットや動画の作成が、ふるさと学習の推進に大きく影響した。児童生徒は、ふるさと篠南の史跡や自然について調べたことを話し合い、図や動画にまとめることで、ふるさとを見つめ直し、篠南を愛する気持ちが高まってきている。また、この取組を文化祭で披露したことが、地域住民や保護者の評価の高まりにつながっている。 ◆学校運営協議会委員をはじめ、多くの方が人材バンクに登録していただいている。その情報を教職員に周知し、よりよい活用の在り方を話し合う。また、篠南プロジェクトで作成したパンフレットや動画についても効果的に活用していく。	教職員2	A	**100**	92	8	0	0
				児童生徒7	A	**100**	56	44	0	0
				保護者2	A	**100**	73	27	0	0
				地域2	A	**100**	77	23	0	0
家庭・地域との連携	各種たよりやホームページ等を通して、学校の取組や児童生徒の様子を積極敵に情報発信している。 目標値：教職員、保護者、地域住民の**90%以上**が肯定	A	◇ほぼ毎日ホームページを更新してきた。接続者数を見ても増えており、保護者や地域住民を含め多くの方が関心を持って見ていただいている。また、学校だよりや学級だよりも定期的に発行して児童生徒の様子を発信できているため、高評価を得ている。 ◆ホームページや学校だよりにおける情報発信を継続していく。内容については、児童生徒の活動を中心にしながら、保護者や地域住民と連携して取り組みたいことを含めるなど、精選しながら情報発信していく。	教職員3	A	**100**	100	0	0	0
				保護者15	A	**100**	57	43	0	0
				地域7	A	**100**	75	25	0	0
		A	◇学校行事が行われたときはホームページの閲覧数が増加しており、地域住民や保護者の関心が高いことが伺える。そのため、ホームページを中心に、学校の取組や児童生徒の様子を積極的に発信してきたことが、高評価につながっている。学校だよりについては、前期の学校評価で項目の低かった項目を毎月取り上げるなど、保護者と連携して取り組みたいことを情報発信するよう努めた。 ◆地域や保護者が楽しめるよう、引き続きホームページを中心に情報発信していく。学校だよりについては、地域住民や保護者が興味を持って読めるよう内容に変化を与えながら発行していく。	教職員3	A	**100**	92	8	0	0
				保護者15	A	**100**	73	27	0	0
				地域7	A	**100**	69	31	0	0

学校運営協議会委員の意見	・地域住民は学校の存続を願っている。 ・来年度予定されている中国・四国へき地研究大会は、篠山小中学校をアピールできる絶好の場ではないか。昨年度の部活動で全国5位という輝かしい結果は、地域ぐるみの力が大きいと思われる。篠山小中学校が全国のへき地のモデルとなるよう、成果をしっかりとアピールしてほしい。	学校の対応	・ふるさと学習については、総合的な学習の時間を中心に地域人材を活用しながら取り組んでいる。今後、篠南プロジェクトを核とし、児童生徒がふるさとの良さを再認識するとともに、ふるさとに誇りを抱くことができるような教育活動を展開していく。学校運営協議会と連携・協働し、講師等地域人材の発掘と活用についても情報共有しながら、人材バンク作りを積極的に行う。 ・本校の特色である小中9年間を見通した教育活動は、中国・四国へき地研究大会の中心の一つとなることが予想される。今後、南予教育事務所の要請訪問等を活用しながら、研修面でも更なる充実を図る。
	・生徒のボランティア活動を知った方が、篠山小中学校に興味を持ち、文化祭に足を運んでくれた。小中連携を目指した教育やふるさとを大切にしている教育を評価している。 ・小中一貫教育を語る時、宿毛市長は「篠山を手本にしてほしい」と言っていた。自信を持って取り組んでほしい。		・篠山小中学校の取組を多くの方々に評価していただいている。今までの取組を継続しながら、深化させていきたい。また、学校運営協議会委員をはじめ、地域住民の声を聞き、それを反映させながら共に特色ある教育を推進していく。 ・多くの方々にホームページを見ていただいている。今後もホームページを毎日更新することを心掛け、本校の児童生徒の活躍を積極的に発信していく。また、篠南プロジェクトで作成した動画やパンフレットの効果的な活用についても検討していく。

2　確かな学力の定着と向上

基礎学力の定着	児童生徒は、「読み・書き・計算」の基礎的・基本的な知識や技能が身に付いている。 目標値：教職員、児童生徒、保護者の**85%以上**が肯定	A	◇児童生徒、保護者、教職員共に高い肯定率である。各教科での丁寧な取組に加え、学習委員会の活動「ドリルパーク祭り」（chromebookのドリルパークを使った学習）に取り組ませることにより少しずつ基礎学力の定着が図られたと考える。しかし、保護者の中には、2の評価をしている方がおり、テストの結果等から子どもの学力を心配していることが伺える。 ◆これらの取組を継続していき、より効果的なものとなるよう、学習の振り返りをしっかりと行う。また、保護者の不安感を解消するために、児童生徒一人一人の困り感に応じて、休み時間や「ささなじゅく」などの補充の時間を利用して、繰り返し粘り強く、基礎学力定着に向けて指導していく。また、懇談会のみでなく、こまめに連絡を取っていく。	教職員4	A	**100**	0	100	0	0
				児童生徒2	A	**100**	66	34	0	0
				保護者3	A	**93**	14	79	7	0
		A	◇肯定率が前期と全く同じではあるが、その内訳を見ると4を選択した割合が教職員、児童生徒、保護者ともに増えてきている。日々の授業だけでなく、個に応じた指導に対して評価していただいていると思われる。一方で、前期と同じ割合で2の評価をされた保護者がいる。テスト結果を踏まえ、更に個に応じた指導を行っていくことで、誰一人取りこぼすことがないように努める。 ◆児童生徒の学力に対して不安感を持っている保護者はいる。授業でのフォローはもちろんのこと、必要に応じて補充の時間を確保し、個に応じた指導を継続して、本人や保護者の不安解消を図っていく。	教職員4	A	**100**	8	92	0	0
				児童生徒2	A	**100**	67	33	0	0
				保護者3	A	**93**	27	66	7	0
授業改善 ICTの活用	教師は、ICTを効果的に使い、生徒が自分の考えを分かりやすく表現した入り、物事を論理的に考えたりすることができるような授業を実践している。 目標値：教職員、児童生徒の**85%以上**が肯定	A	◇ICT機器を活用した「効果的な言語活動」に重点を置き、各教科で授業改善に努めたことから、児童生徒、教職員共にA評価となっている。児童生徒はコンピュータを使った授業は楽しいと評価している一方で、ICT機器の効果的な活用に不安を感じている教職員もいる。 ◆毎月の研修会で小学校も中学校もICT活用研修を取り入れている。夏季休業中にICT支援員を活用した研修を2回行うなど、今後も積極的に研修を行うことで、少しずつ教職員の自信のなさを取り除き、授業で表現したり論理的に考える授業に活用したりできるようにしていく。	教職員5	A	**94**	40	54	6	0
				児童生徒3	A	**100**	50	50	0	0
		A	◇長期休業中に教職員のICT研修を行ったが、活用には十分ではなかったのか肯定意見の割合が減った。一方、児童生徒の肯定意見の割合は増加している。教職員は不安に思いながらも、授業でしっかりと指導しているからこそ、児童生徒の高評価につながっている。 ◆授業の内容によっては、必ずしもICTの利用が有効ではない場合もある。教職員は、授業の展開を計画する時にICTを活用するのか否かを考えるなど教材研究を行う。また、ICTの効果的な活用について互いに声を掛け合い、教え合いながら実践していくことで、苦手意識を払拭していく。	教職員5	A	**92**	8	84	8	0
				児童生徒3	A	**88**	44	44	12	0
家庭学習の定着	児童生徒は、家庭学習の習慣が身に付いている。（低学年20分、高学年60分、中学生は90分以上） 目標値：教職員、児童生徒、保護者の85%以上が肯定	C	◇保護者はC評価となっており、保護者は我が子が家庭学習の目標時間に到達していないと考えている（目標時間分机に向かっていない）結果となった。宿題の直しがたまっていたり、休日明けに課題が出しづらかったりする児童生徒がおり、家庭学習の在り方を見直す必要がある。 ◆家庭学習の習慣が身に付いていない児童生徒に対して、夏季休業中は時間を決めてMEETを活用しながら個別指導を粘り強く行う。また、平日から見通しを立てて学習できるよう声掛けをするなど、個別に支援していく。さらに、マスターウイーク中の木曜日をノーディスプレイ日として設定し、保護者と連携を強化して家庭学習の習慣化を図る。	教職員6	B	**80**	30	50	20	0
				児童生徒14	B	**84**	54	30	16	0
				保護者4	C	**64**	21	43	36	0
		C	◇教職員・児童生徒共に前期に比べ肯定意見の割合は減っているが、保護者の肯定率は上がっている。家庭での取組がよりよい方に向かっていると保護者は捉えている。しかし、児童生徒自身は、前期の肯定率に比べて低くなっている。2学期はノーディスプレイの日も設けたが、その取組が徹底できていたのか、または、その時間が家庭学習の時間確保につながっていたのかは定かでない。 ◆家庭学習において配慮を要する児童生徒の家庭での過ごし方をチェックし、その困り感に対する支援を明らかにする。何が原因で守れないのか教育相談を実施し、個別の対応を強化していく。	教職員6	B	**83**	17	66	17	0
				児童生徒14	C	**78**	50	28	16	6
				保護者4	C	**73**	33	40	27	0
読書活動の習慣化	児童生徒は、読書の習慣が身に付いている。 目標値：教職員、児童生徒、保護者の85%以上が肯定	C	◇児童生徒、保護者共にC評価となっている。小学生はよく本を借りているが、中学生の一部の生徒は、朝読書の時間のみ本を読んでいる状態である。また、保護者がC評価をしているのは、家庭で読書をする姿を見ていないことが原因であると考えられる。 ◆家庭での読書時間や読書量を把握した上で、学習委員会を中心にイベントを企画する。また、親子読書の日を1週間に1回設定するなど、保護者と連携して読書習慣を身に付けさせる。	保護者5	C	**64**	21	43	36	0
				児童生徒5	C	**72**	42	30	22	6
		C	◇学習委員会が企画したイベントや親子読書の日の成果が見られたのか、保護者の肯定率が上がった。しかし、児童生徒自身の評価を見ると、否定的な意見の割合が増えている。家庭学習の習慣と同様、本に親しまない児童生徒は決まっている傾向がある。 ◆親子読書は可能な限り継続して、家庭でも本に親しんだり、向き合ったりできる環境を整えていく。教職員も児童生徒とおすすめの本について話す時間を確保し、互いの読書に対する意識を高めていく。また、本に親しめない児童生徒に対しては、読書の意義や楽しさについて話すなど、個別に対応に当たる。	保護者5	B	**80**	13	67	20	0
				児童生徒5	C	**72**	39	33	16	12

学校運営協議会委員の意見	・ノーテレビ、ノーディスプレイの日は、日常の生活にめりはりがあってよいため、ぜひ取り組んでほしい。 ・リモート学習や遠隔授業は、少人数の学級にとって有効である。 ・プログラミング学習において、活用できる方を知っている。 ・時間の確保が難しいのは分かるが、親子で本を読む、読み聞かせを充実させるなど、教職員や保護者の意識をかえることが大切である。読書は、語彙力や表現力の高まりが期待されるため、まずは、読書の大切さや意義について知らせてほしい。	学校の対応	・学力の向上や「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、教職員のICT研修を充実させ、今まで以上にICTの効果的な活用を心掛けるなど、積極的な授業改善を行う。また、他校との遠隔授業も積極的に行い、児童生徒の思考力や表現力を高める。 ・家庭学習の習慣化については、C評価になっていることからまだまだ課題が残る。児童生徒への指導に加えて、家庭との連携の強化が必要である。マスターウイーク中のノーテレビ、ノーディスプレイの日を中心に家庭学習の習慣化を図る。 ・児童生徒は、朝読書の時間を活用して読書に親しんでいるが、家庭での読書については習慣化できていない傾向にある。読書の必要性や意義について知らせるとともに、家庭における親子読書や、読書週間におけるイベントなどを企画し、読書活動の習慣化を図る。
	・昔とは異なり、児童生徒を誘惑する機器が増えてきたことを心配している。児童生徒は、ゲームやスマートフォンに時間を取られる傾向があるのではないか。 ・ゲームやスマーフォンの使用については、約束事や大人の目を介することを含め、対策を講じる必要がある。		・ノーテレビ、ノーディスプレイの日は、家族ぐるみで取り組んでいただき、効果が見られた家庭があった。また、親子読書についても、本の内容について親子で話し合うなど、コミュニケーションを取る機会が増えたという意見があった。今後も家庭と連携しながら、引き続き取り組んでいく。 ・家庭学習や読書を習慣化させるためには、その意義を児童生徒に理解させる必要がある。習慣化されていない児童生徒と教育相談を行い、その意義や必要性について伝えていく。 ・「ICTを使った学習が楽しい」と感じている児童生徒は多い。引き続き効果的な活用を心掛け、授業改善につなげる。

3　豊かな心と健やかな体を育てる教育の推進

道徳教育の充実	道徳科や特別活動等の授業を通して、自他を思いやる児童生徒が育っている。 目標値：教職員、児童生徒、保護者の**85%以上**が肯定	A	◇教職員、児童生徒、保護者共に評価が高い。道徳科や特別活動において、周りの生徒の考えに触れたり、自分自身を見直したりする活動を取り入れていることが、児童生徒の心の成長につながっている。また、地域住民の交流、小中の交流を通して、自他を思いやる言動が見られるようになってきた。。 ◆引き続き、道徳科や特別活動等を中心に、児童生徒の心の成長を促す教育を実践する。また、日常的に児童生徒の言動に気を配り、機を逸さず粘り強く指導をしていく。	教職員7	A	**100**	60	40	0	0
				児童生徒13	A	**95**	82	13	5	0
				保護者10	A	**100**	36	64	0	0
		A	◇ファミリー班を中心とした小中の交流や地域住民との交流を通して、他を思いやる言動が増え、A評価となっている。しかし、一部の児童生徒や保護者で否定的な回答も見られた。 ◆引き続き、道徳科や特別活動を中心に、児童生徒に寄り添いながら心の成長を促す。また、児童生徒の表情やつぶやきなどの変化を見逃すことがないよう、日常的にしっかりと見取り、教職員間で情報を共有しながら指導に当たる。	教職員7	A	**100**	67	33	0	0
				児童生徒13	A	**100**	89	11	0	0
				保護者10	A	**93**	73	20	7	0
挨拶・返事運動の推進	気持ちのよい挨拶・返事ができる児童生徒が育っている。 目標値：教職員、児童生徒、保護者、地域住民の**90%以上**が肯定	A	◇全体的に概ね評価は高い。しかし、地域住民がB評価になっているのは、いつも決まった場所や決まったシチュエーションでは挨拶ができるが、それ以外ではまだ課題あるのではないかと考えられる。また、返事についても、やや小さかったり、返ってこなかったりすることもあった。 ◆教職員が率先して行う姿勢を見せながら、機会を捉えて今以上に気持ちのよい挨拶ができるように継続指導をしていく。返事については、人の話を聞くことの大切さと合わせ、短くはっきりと返事をすることを繰り返し指導して定着させる。	教職員8	A	**100**	10	90	0	0
				児童生徒9	A	**100**	64	36	0	0
				保護者7	A	**100**	43	57	10	0
				地域3	B	**88**	38	50	12	0
		A	◇全体的に評価は高い。2学期は、多くの行事や活動があり、地域の方に来校していただく機会が増えた。そのような機会を捉えて、教職員が共通理解を図りながら挨拶指導を行ったことが高評価につながっている。 ◆A評価ではあるものの、教職員と児童においてはやや数値が低くなっているので、引き続き機会を捉えた継続指導をする。また、返事については、十分とは言えない部分がある。マスクをして大声を出さない習慣が身に付いてしまっているので、相手意識をもった気持ちのよい返事ができるように指導を継続していく。	教職員8	A	**100**	0	100	0	0
				児童生徒9	A	**100**	56	44	0	0
				保護者7	A	**100**	67	33	0	0
				地域3	A	**100**	77	23	0	0
後始末運動の推進	児童生徒は、使用した物をきちんと片付ける習慣が身に付いている。 目標値：教職員、児童生徒、保護者の**85%以上**が肯定	B	◇児童生徒は高評価であるが、特に保護者の評価が低いことから、児童生徒と保護者や教職員の間で意識にずれがあることが分かる。特に3割以上の保護者が、片付けの習慣が身に付いていないと回答している。 ◆どのような場面で片付けができないのかを明らかにする必要がある。保護者に聞き取り、明らかになった課題を生活委員会の活動と関連させながら改善につなげる。また、片付けの重要性について触れるとともに、家庭と連携した指導を継続して行う。	教職員9	B	**80**	10	70	20	0
				児童生徒12	A	**94**	46	48	6	0
				保護者9	C	**64**	14	50	36	0
		B	◇前期に比べると、教職員の評価が高くなった。生活委員会を中心に、靴箱やロッカーチェックを行うことで片付けや整理整頓を意識付けることができた。しかし、家庭での片付けや整理整頓ができていないために、保護者の評価は低いままである。 ◆引き続き、具体的に片付けができていない場面を明らかにし、その課題を生活委員会の活動と関連させながら改善につなげる必要がある。また、校内での取組の成果を保護者にも知らせ、家庭と連携した指導を継続して行う。	教職員9	A	**92**	0	92	8	0
				児童生徒12	A	**94**	55	39	6	0
				保護者9	C	**60**	40	20	40	0
健康な生活習慣の確立	児童生徒は、早寝・早起き・朝ごはんの習慣が身に付いている。 目標値：教職員、児童生徒、保護者の**85%以上**が肯定	B	◇児童生徒は、高い評価を出しているが、保護者の評価は低い。マスターウィークの調査では、児童の早寝の習慣が身に付いていないことが明らかになった。毎日の健康観察でも同様の結果が出ている。 ◆なぜ早寝ができないのか、児童生徒や保護者の声を拾うことで原因を探る。また、マスターウィーク調査結果を分析・考察し、児童生徒への指導にフィードバックさせる。早寝の習慣は、家庭の協力が必要であるため、「保健だより」を通して、課題や改善の方法を発信し、家庭と連携した取組を行う。	児童生徒15	A	**100**	100	0	0	0
				保護者13	C	**72**	36	36	28	0
		A	◇「早寝・早起き・朝ごはん」のアンケートから課題を見出し、改善点・工夫点・ルール作り等について家の人と話し合う機会を作ったことにより、保護者の評価がCからAになった。しかし、「早寝」については、家庭によって考え方が異なり、達成できているとは言えない。 ◆今後も、アンケート結果を家庭で話し合っていただくなど、自分の生活を振り返る機会を確保する。特に、「早寝」については、前の月のマスターウイーク調査結果から課題となった点を意識させることで、習慣化を図る。	児童生徒15	A	**94**	38	56	6	0
				保護者13	A	**93**	53	40	7	0
体力つくりの推進	体育の授業や部活動等により、児童生徒の体力・運動能力が向上している。 目標値：教職員、児童生徒、保護者の85**%以上**が肯定	A	◇体力テストの結果を見ると、A判定の児童の割合は昨年よりも減少したが、生徒は増加している。各項目の数値を見ると、運動能力が大きく低下しているわけではない。体を動かすことに抵抗を感じている児童生徒はおらず、放課後の水泳練習や部活動に意欲的に取り組めたことが、高評価につながっている。 ◆体力テストで数値が低かった項目に関する運動を、体育学習の準備運動として取り入れて運動能力の向上を図る。また、運動能力の向上には、メンタルの影響も大きく左右する。心と体のバランスを図りながら、体力つくりを推進していく。	教職員10	A	**90**	30	60	10	0
				児童生徒10	A	**100**	71	29	0	0
				保護者12	A	**93**	57	36	7	0
		A	◇体育の授業に積極的に取り組む児童生徒が多く、昼休み等も意欲的に体を動かしている。放課後の陸上練習や部活動もほとんどの児童生徒が取り組んでおり、、体力・運動能力の向上にもつながっている。 ◆運動量が減ってくる冬の時期に、マラソンやなわとび等で具体的な目標を持たせる。特に、1月末にある校内マラソン大会や2月にあるふれあい健康マラソンの出場を目標にして、体育の授業や朝の自主練習、放課後のマラソン練習や部活動に取り組ませる。	教職員10	A	**100**	67	33	0	0
				児童生徒10	B	**84**	78	6	6	0
				保護者12	A	**93**	86	7	7	0

学校運営協議会委員の意見	・相手の顔を見ての挨拶ができない児童生徒はいるが、全体的に挨拶はよくできている。今後、多くの方々と関わる上で、個々の児童生徒の特性に応じて、人とつながっていることや、自分の気持ちを伝えることの大切さを伝えてほしい。	学校の対応	・挨拶や返事については全体的に高評価ではあるが、きちんとできにくい児童生徒がいるため、意義や大切さについて継続的に指導していく。また、児童性生徒は放課後の体育活動や部活動に熱心に取り組んでおり、成果を収めている。引き続き、心と体のバランスを図りながら体力つくりを推進していく。 ・後始末運動については、学校では概ねできているが、家庭ではできていないことが明らかになった。どのような場面で後片付けができていないのか保護者に聞き取り、改善策を考えて対応に当たる。また、家庭での整理整頓や片付けの状況を保護者に把握していただき、協力を求める。 ・早寝の習慣化については、マスターウイークの結果を保健だよりで知らせ、家庭の協力を求める。
	・来校した時や登校中などでは、児童生徒は大きな声で挨拶をしている。また、児童生徒と話しても元気よく受け答えができている。 ・保護者の評価が低い後始末については、保護者の協力が必要である。 ・児童生徒は放課後の練習や部活動に積極的に取り組み、十分な成果を収めている。これは篠山小中学校をアピールできる一つの要素とも言える。		・後始末運動の推進については、生活委員会を中心に取り組んだ成果が校内で見られた。家庭における後始末については、「履物を並べる」や「机の上の整理整頓」など、具体的な場面を設定して、連携を図りながら一つずつクリアさせていく。 ・保健だよりで課題や改善点を啓発したことが、早寝の習慣化につながった。今後も生活面に関する事柄を提案し、基本的な生活習慣の定着につなげたい。 ・運動面ではソフトテニスで県代表になったり、賞を獲得したりするなど、活躍の場が多く見られた。しかし、体を動かすことが苦手な児童生徒もおり、運動の習慣化が求められる。体を動かす時間を確保することで、運動能力の向上につなげていく。

4　健全育成の推進

規範意識の醸成	「決まり」や「マナー」を遵守し、自立心と規範意識のある児童生徒に育っている。	A	◇児童生徒は規範意識が身に付いており、「決まり」や「マナー」を守りながら生活できているため、全体的に高い評価を得た。生徒が児童の手本になるという伝統ができていると思われる。 ◆善悪の判断がきちんとできる児童生徒の育成を目指し、指導を継続していく。小中合同の集会や学習などで模範的な児童生徒を称賛したり、できていない行動について指導したりするなど、あらゆる機会を捉えて規範意識の高揚に努める。	教職員11	A	**100**	10	90	0	0
				児童生徒11	A	**100**	66	34	0	0
				保護者8	A	**100**	21	79	0	0
				地域4	B	**88**	63	25	12	0
	目標値：教職員、児童生徒の**90%以上**が肯定	A	◇児童生徒が「決まり」や「マナー」を無視することはほとんど見られず、児童生徒全員がルールを守って生活している。しかし、周りの大人が中学生に、小学生なら中学生や周りの大人が手を掛けすぎる傾向があり、それが影響して自分で考えて行動する力が弱く感じる。 ◆規範意識の育成については、時と場を自覚させるなど継続して指導に当たる。自立心の確立については、各集会や学校行事において、「自分たちが行動しなくてはならない」という意識を持たせるよう事前指導を行う。また、学校だよりに関連した内容を掲載し、保護者や地域住民にも自立心の育成に協力を求める。	教職員11	A	**92**	8	84	8	0
				児童生徒11	A	**100**	78	22	0	0
				保護者8	A	**100**	53	47	0	0
				地域4	A	**92**	62	30	8	0
個に応じた指導の充実	教師は、生徒一人一人の教育的なニーズに応じて生活や学習上の困難の克服を目指した指導・支援に努めている。	A	◇小規模校の特性を生かし、一人一人に応じたきめ細かな指導が日頃からできているため、高評価になっている。 ◆今後も全教職員で児童生徒一人一人を見守りながらその場その場で適切な指導や支援を行う。また、些細なことであっても職員会や研修会で情報交換を行い、同一歩調で指導に当たる。	教職員12	A	**100**	50	50	0	0
	目標値：教職員の**90%以上**が肯定	A	◇前期に引き続き、小規模校の特性を生かした個に応じたきめ細かな指導が日頃からできていることが高評価につながっている。 ◆今後も全教職員で児童生徒一人一人を見守りながら、適切な指導や支援を行う。また、職員室内で日々の児童生徒の様子についても情報交換を行い、全教職員が共通理解を図りながら指導に当たる。	教職員12	A	**100**	67	33	0	0
生徒指導の充実	教師は、児童生徒一人一人と教育相談などを通して悩みの把握に努め、いじめを絶対に許さない、見逃さない学校づくりに努めている。	A	◇毎月の「なかよしアンケート」やそれを踏まえての教育相談がきちんと実施されていること、教職員がタイムリーな指導、支援を行った結果が高評価につながっている。 ◆今後も引き続き、「なかよしアンケート」及び教育相談を実施し、児童生徒の思いや願いを早期に把握した上で素早い対応に努める。保護者や地域に対しては、ホームページを中心に学校の取組や児童の様子等について、積極的に公開していく。	教職員13	A	**100**	60	40	0	0
				保護者11	A	**100**	36	64	0	0
				地域5	A	**100**	63	37	0	0
	目標値：教職員、保護者の**90%以上**が肯定	A	◇教職員、保護者、地域共に高評価である。保護者や地域に対して、ホームページを中心に学校の取組や児童生徒の様子を公開した。また、小規模校の特性を生かし、児童生徒一人一人の様子について全教職員が把握し、その時に応じた適切な指導、支援を行っている。 ◆今後も、全教職員による輪番制の教育相談や「なかよしアンケート」を実施することはもちろん、日々の職員室内でのちょっとした情報交換も行いながら、児童生徒の思いに寄り添った素早い対応に努める。また、引き続き、保護者や地域への情報発信も行っていく。	教職員13	A	**100**	83	17	0	0
				保護者11	A	**100**	47	53	0	0
				地域5	A	**100**	69	31	0	0

学校運営協議会委員の意見	・児童生徒は、固定された人間関係から、多様な人がいる社会へと進路をたどることになる。LGBTなど、人権的な多くの事案を扱い、正しい行動がとれるよう導いてほしい。	学校の対応	・小規模校の特性を生かし、児童生徒との日々のコミュニケーションや日記指導、毎月実施している小中合同の教育相談などを利用して、きめ細かな指導や対処を行う。 ・進学等により、環境が小集団から大きな集団へ変化した場合でも対応できるよう、学校行事で活躍できる場を経験させる。また、校区別人権・同和教育懇談会や日常の特別活動や道徳科で人権教育を積極的に推進していく。
	・教職員は、児童生徒一人一人と向き合い諸問題の未然防止に努めている。 ・児童生徒は、毎日を楽しく過ごしている。 ・学校行事の最後に児童生徒の感想発表の場があるが、いつも全員が挙手することに感心する。		・日頃から児童生徒の表情や言動に気を配り、情報交換を積極的に行うなど、引き続き、全教職員で全児童生徒の健全育成に努める。 ・児童生徒が自信を持って意見を言える学校、それを認め合える学校づくりを行う。

5　安全・安心な教育環境の整備、教職員の資質・能力の向上

安心・安全な教育環境の整備と充実	学校は、災害等に対する安全教育の推進を行い、「自分の命は自分で守り切る」ことのできる児童生徒の育成に努めている。 目標値：教職員、児童生徒、保護者の**90%以上**が肯定	A	◇1学期は地震、不審者等の避難訓練の他、防災参観日として炊き出し訓練や心肺蘇生法、引き渡し訓練を実施した。参加者の意見をまとめると、児童生徒とともに活動しながら学習できたことがよかったという意見が多かった。災害に対して「自分の命は自分で守り切る」学習が親子、地域住民で協力してできたことが評価されている。 ◆2学期も定期的に避難訓練等の安全教育を計画しているので、確実に実施する。また、土砂災害に対する学習会も計画しているため、保護者や地域住民にも積極的に声を掛け、地域ぐるみでの安全教育を充実させる。	教職員14	A	100	70	30	0	0
				地域6	A	100	63	37	0	0
				保護者14	A	100	50	50	0	0
		A	◇地震に関する定期的な避難訓練や砂防学習会、シェイクアウトえひめなど、計画している避難訓練や学習会を実施することができた。特に、砂防学習会は日程を変更したにも関わらず、地域住民や保護者の参加を得ることができた。緊急地震速報が流れた場合、児童生徒は素早く机の下に隠れるなど、自分の命を守る行動が取れている。 ◆3学期は、火災に関する避難訓練を計画している。引き続き、計画的に避難訓練を実施していく。また、毎月の安全点検においても、教職員で点検場所を振り分けて、定期的に行うことができている。今後も、安全な教育環境を保ち、安全教育を充実させていく。	教職員14	A	100	58	42	0	0
				地域6	A	100	63	37	0	0
				保護者14	A	100	67	33	0	0
教職員としての資質と指導力の向上	信頼される教師を目指し学力向上、生徒指導等についての研修や自己研鑽に努めている。 目標値：教職員の**90%以上**が肯定	A	◇昨年度導入された一人1台端末を使った学習が定着し、教職員は工夫しながら学習指導に当たっている。また、職員会や研修会で情報交換する時間を確保し、児童生徒一人一人に合った対応について話し合うなど、生徒指導においても小中の連携が図られていることが、高評価につながっている。 ◆Chromebookを使った学習指導は、まだまだ改善の余地がある。月1回の研修会や、夏季休業中のICT支援員を活用した研修会など校内研修を充実させることで、教職員一人一人の指導力を高める。また、宿題配信を個別に行うなど、児童生徒一人一人に応じた学習指導を行い、学力の向上へとつなげる。	教職員15	A	100	40	60	0	0
		A	◇定期的な研修会で、学力向上に関する研修に取り組んだり、ICT支援員を活用したChromebook研修を行ったりしたことで、教職員の資質能力は向上してきた。また、前期よりも小中の情報交換が頻繁に行われるようになったため、互いが切磋琢磨して高め合えたことが、高評価につながっている。 ◆ICTを活用した学習指導は、まだまだ改善できると考えられる。反対に、読み・書き・計算など、従来通りの学習も必要である。ICTを活用した学習と従来の学習をうまく組み合わせ、工夫しながら児童生徒に合わせて学力向上を目指す。また、児童生徒一人一人に応じて接し方や言葉掛けを工夫するなど、生徒指導面においても信頼される教職員を目指す。	教職員15	A	100	25	75	0	0

学校運営協議会委員の意見	・もし災害が起きた場合、篠南地区は孤立してしまう可能性が高い。また、高齢者も多いため、その方々を第一に考えた行動を取る必要がある。今後、地域が中心となり、高齢者やその住所などのマップを作りたいと考えている。 ・近年は、愛南町防災対策課を講師として派遣していただいたが、宿毛市の危機管理課も活用してはどうか。また、体育館にある防災対策グッズにはどのようなものがあるか、知らない住民も多く、周知していく必要がある。	学校の対応	・保護者や地域住民に参加していただいた避難訓練が大きな効果を得たが、反対に、地域住民が主体となり学校が協力する方法も考えられる。互いに自助・共助ができるよう、よりよい方策を地域とともに考えていきたい。2学期は砂防学習会などの防災学習を計画しているため、保護者や地域住民に呼び掛け、児童生徒と共に学習に参加していただく。体育館に設置されている防災グッズについては、AEDも含め、学校だよりを通じて保護者や地域住民に周知していく。 ・児童生徒の学力向上に向けて、小中教職員が連携できていることが高評価につながっている。また、些細なことでも職員朝会や職員会議・研修会で情報を共有し、担当が中心になって教育活動を行えている。引き続き、自己研鑽に努め、信頼される教職員を目指す。
	・いつ来校しても掃除が行き届き、教育環境は適切に保たれている。児童生徒や教職員が努力していることが分かる。 ・高齢者の地区や家を全て把握している。その資料を防災マップ作りや災害時に役立つ資料を作成するときに活用するなど、地域も自助・共助の体制を整えたい。		・地域全体の高齢化が進む中、地域全体で防災体制を整える必要がある。総合的な学習の時間で学校ができることを模索していく。また、来年度の防災参観日は、地域との連携を図りながら、避難所運営など地域全体で行える防災学習を計画していく。 ・来年度のへき地教育の会場校として、引き続き小中の連携を図りながら、自己研鑽を重ねていきたい。